

つなげる つたえる つづける



尚絅学院大学ボランティアチーム **TASKI**

～東日本大震災からのあゆみを未来につなげる～

本事業は、「住友商事 東日本再生フォローアップ・プログラム2018」の助成を受けて実施しております。

発行日: 2020.1.31

発行: 尚絅学院大学 交流推進部

宮城県名取市ゆりが丘 4-10-1

TEL/022-381-3315 (大学事務室 連携交流課) TEL/022-381-3408 (ボランティアステーション)

 尚絅学院大学

はじめに

目次

03 第1章 | 東日本大震災とは…

07 関上バスツアー学習会で見る
日和山の変化-2012~2019-

09 column.1 [住民さんインタビュー]
関上中央町内会会長／長沼 俊幸さん

11 被災地を訪問した大学生の声

13 第2章 | 復興ってなんだろう？

15 尚絅学院大学ボランティアチーム
TASKIの活動の移り変わり-2011~2019-

17 ボランティアチームTASKIの活動の紹介

20 column.2 [先輩インタビュー]
人間心理学科2013年卒業／斎 美紀さん

21 ボランティアチームTASKIの
歴代活動パネル集-2012~2019-

24 column.3 [ゆりあげ伝言板]
2019.5.26 関上地区まちびらき

25 第3章 | 私たちにできることはなんだろう

29 大学間連携プログラムの紹介

31 全国の大学生・高校生の声

33 被災地のリレー～神戸から学ぶ～

35 まとめてみよう！

37 TASKIの想い

41 TASKIがこれから目指すこと…

42 おわりに

尚絅学院大学は、2011年の東日本大震災直後から地元名取市において大学として被災者支援活動を行ない、学生有志が立ち上げた「ボランティアチームTASKI(たすき)」や市民ボランティアと共に、名取市内の仮設住宅の支援を継続して行なってきました。

年々、被災者を取り巻く住環境が大きく変化する中、学生たちは、被災された住民の皆さんの“自らの復興”を妨げない支援のあり方とは何か、悩み、考えながらも継続して活動を続けています。

この度、「住友商事 東日本再生フォローアップ・プログラム2018」の助成をいただき、震災から9年という時を迎えるにあたり、これまで被災地の課題に学生たちが取り組み悩んできたこと、感じたこと、繋いできたこと、伝えてきたことなどを振り返り、このあゆみを、教訓も交えて冊子としてまとめました。また、この冊子の中で被災地の現状も合わせてお伝えしています。

これは、実際に「関上バスツアー学習会」でガイドを務めるために調べたことや学んだこと、復興公営住宅や集会所等において、学生が住民の皆さんから聞いたお話をもとにまとめています。

この冊子を活用し、被災地の状況を他の地域や次世代へと伝えていくとともに、これからも「地元“宮城の大学生”だからこそできる寄り添い支援活動の継続」と「住民の皆さんの自立を妨げない形での復興」という課題に取り組んでいきたいと考えております。

書いてみよう

震災があった日のことを覚えてていますか?
皆さんにとってどんな出来事でしたか?

日和山

日和山は、閑上漁港への船の出入りを見るためと、漁師が気象、海上の様子などをみるため、1920年(大正9年)に築造された山です。標高6.3mの山頂には、富士姫神社の社殿などがあり、地域の人々が集う憩いの広場として親しまれていましたが、2011年(平成23年)3月11日に発災した東日本大震災による大津波にのみ込まれ社殿が流失、石碑は倒壊してしまいました。山頂に残った木の幹に大津波の爪あとが残っていたことから津波は山頂から2.1mの高さまで水位が達したことが推定されます。(出典:名取市)

*p7-8には震災後の変化をまとめています。

震災後の 日和山



昭和三陸 津波の碑

昭和三陸津波の碑は、昭和8年3月3日の三陸沖を震源地とした地震により発生した津波の様子や被害の内容が記載された記念碑の1つです。(出典:名取市)

石碑には「地震があったら津浪(つなみ)の用心」と書かれ、当時の津波の被害が記されています。
しかし石碑があったにもかかわらず、過去のチリ地震や宮城県沖地震(1978年)で大きな津波が来なかつたことから「閑上には津波は来ない」という認識が広まっていたといいます。

「君の名は。」という映画をご存知の方も多いと思います。実は作品の原点は閑上の日和山だと言われています。
映画監督の新海誠さんは、震災後2011年に名取市閑上に訪れ、閑上の日和山のスケッチを描き、そこから「君の名は。」が製作されたそうです。
2018年に宮城県で行われた新海誠さんの展覧会において、そのスケッチが展示されました。



慰霊碑

震災の犠牲者をしのび、復興に向けた決意を表すために建てられた慰霊碑。



慰霊碑は、震災により犠牲になられた方々が天に上っていくイメージを表すとともに、震災を克服し、復興に向けた決意を新たにする気持ちを込めて、「種の慰霊碑」から発芽した「芽生えの塔」が、この地に豊かさが戻ることを願う「豊穣の大地」から上へと伸びていく様子を表現しています。また、慰霊碑左右の芳名板には、碑文とあわせ、震災により犠牲になられた944名の方の御芳名が記されています。(中略)
慰霊碑の高さは8.4メートルに設定されており(「豊穣の大地」の高さを含む)、この地における津波の高さに合わせたものになっています。この慰霊碑を未来まで引き継いでいくことで、震災の記憶を永く将来の世代まで伝えます。(出典:名取市)

旧閑上中学校

現在は解体され、新しい小中一貫校に生まれ変わりました。



閑上 中学校 慰霊碑

亡くなった中学生を追悼する慰霊碑。訪れた人に優しくなでて欲しいという遺族の方々の願いから、モニュメントの角が丸くなっています。



当時の閑上中学校は、海岸から約1.7km内陸にあり、津波で1階は浸水しましたが、多くの住民が上階に避難して助かった場所です。

震災で14名の生徒の方が亡くなりました。東日本大震災から1年が経った2012年3月11日、旧閑上中学校に慰霊碑が設置され、しばらくは「閑上の記憶」に保存されていましたが、現在は閑上中学校にあります。

閑上バスツアー学習会で見る 日和山の変化－2012～2019－

震災後より毎年実施している「閑上バスツアー学習会」。

現地視察の記録から、日和山周辺の震災後の変化をご紹介します。

日和山

2012年



2014年



2018年



日和山から見た景色の変化（水産加工団地方面）

2013年



2015年



2016年



2018年

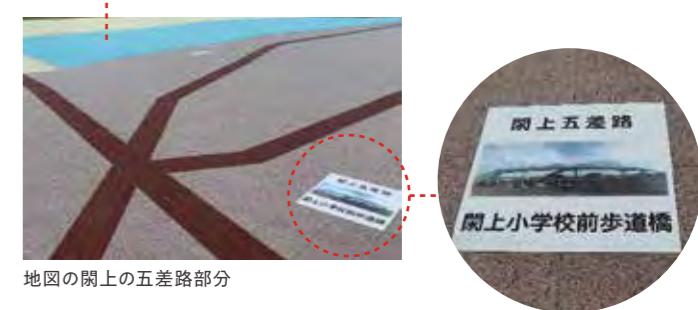


2019年



現在の日和山前の様子

日和山の上や裏にあった石碑が立てられ、2019年5月に「震災メモリアル公園」として整備されました。広場は昔の閑上の地図になっており、遺構も展示されています。



「ここに自分の家があったんだ」



震災以降、「被災地」とよばれるようになった閑上のまち。

長沼さんは、「生まれ育った閑上のまちが、津波によって一瞬にして流れ、子どもの頃の思い出の遊び場も、道路も、家も、大切なものの多くがなくなってしまった。そして東日本大震災と同じように、今や日本全国で災害が起きていて、絶対に安心・安全といえる場所はない。だからこそ、この経験を何十年、何百年先を生きる人たちに伝えていかなければならない。」といつも私たち学生に伝えてくれます。

活動の中で聞いた長沼さんのお話とその想いを、今度は私たち学生が全國の皆さんに伝えていきたいと思います。

地震があったら津波に用心

東 日本大震災による名取市全体の死者数964名のうち、753名が閑上地区の方々でした(2016.3現在)。

ではなぜ閑上の犠牲者が多かったのか…?

一つは、閑上が海に近い町だったこと。そしてもう一つが、「閑上には津波が来ないから大丈夫」という認識の方が多かったことといいます。

あの日まで、宮城県沖地震(1978年)や過去の地震において、閑上でも何度も津波警報が出されたことがあったそうですが、津波は閑上まで来なかったのです。このため、閑上の住民の中には「閑上は津

波の来ない安全なまちだと思い込んでいた」という方もいた、と長沼さんは語っています。

日 和山には、「昭和三陸津波の碑」があります(p5参照)。東日本大震災から80年近く前の、1933年(昭和8年)3月3日の三陸沖の地震によって発生した津波の様子や被害の内容が記載された記念碑です。その碑に刻まれたのが「地震があったら津波に用心」という言葉でした。しかし、碑によって先人たちが後世に残したはずの記録を、ほとんどの人が知らなかったそうです。長沼さんは震災後にその事実を知り、後世に津波の被害を伝え

column.1
住民さんインタビュー
閑上中央町内会 会長
長沼 俊幸さん



繰りには形に残すだけではなく、言葉で『今』伝えていかなければならない、と私たちに教えてくれました。



震災当日からの避難生活～長沼さんの場合～

2011年3月11日
14時46分 地震発生

約40分後 帰宅し家族全員の無事を確認
→家ごと津波に流され、屋根の上で一夜を過ごす

3月12日 自衛隊に救出され避難場所へ

3月14日 指定避難所へ移動

避難所に移ってから…

5月11日 愛島東部仮設住宅に移る
→6年の間、仮設住宅で生活

2017年7月 住宅を再建し、閑上へ

自分と奥さん以外の家族を避難場所へ行かせる。2人は家の様子を確認するため残ったが、「津波が来る!!」と外から聞こえてきた。外に出て急いで車に乗りうとしたところ、津波が来るのが見えたため、家に戻り2階へ。ベランダに行こうとした時に、いきなり「ドンッ」と大きな音と共に家が揺れた。はい出て外を見たら自分の家が水の上に浮いていた。すぐに屋根裏に奥さんを連れて、そこから屋根へ上がる。何が起きているのか全く理解できていなかった状態であったが、そのまま一夜を過ごした。

そのまま屋根の上で耐え続け、翌日の夕方に自衛隊に救出され、避難場所へ移動。

「みんなどこかで無事でいるだろう…」と思っていたが、徐々に周囲から“人が亡くなった”という話を耳にするようになり、やっと「大変なことが起きてるんだな」とはじめてわかった。市役所の近くの避難場所から、指定避難所の小学校へ移動。



(出典:名取市震災アーカイブ)

寝ている人もご飯を食べている人も、隣の家族や周りの寝食の様子が全部見えるという状況が長く続くと大変。精神的に落ち着かず、自分たちのプライバシーがないといった日々が続く。

仮設住宅に移ったことで、避難所での生活と比べて「やっと人間らしい暮らしができる」と一息。はじめの頃は避難所とは違う自分たちの部屋や浴室に嬉しく思っていた。しかし、生活していく上で、部屋の狭さや不便さに不満も出るよう…。“仮設”的な住宅に何年も暮らしていれば家具や食器、洋服など生活に必要なものが増えていき、少しづつ狭く狭くなっていました。

仮設住宅から閑上に移り住む。住宅有志の会や町内会を通して閑上の新たなコミュニティ形成に尽力。町内会長となり、様々なイベントを開催している。

自宅を再建して「良かった」ことだけではない

仮 設住宅から自宅再建したこと
で、新たな生活をスタートした長沼さん。震災のことを深く知らない方から「良かったね」「昔の生活にまた戻れたね」といわれることがあるそうです。

しかし、長沼さんはそれらの言葉は「ちがう」と私たちに教えてくれました。「何も元に戻っていない、昔の閑上とまちの風景は全く違うし、新しい閑上に残った住民さんは昔の3分の1だ。家の二重ローンも残っているし、ずっと不安に思っている。仮設からようやく終の棲家に移ることが出来て安心はしているが…。」閑上の懐かしい匂いや風を感じながら、「やっと閑上

に戻ってきて、ここでの生活を新しく始めることができる」という気持ちと、これから的生活や、町内会運営、新しい閑上の町への期待と不安が入り混じる気持ちを率直にお話してくださいました。



長沼さんはいつも学生が来ると「また5年後、10年後に閑上に遊びに来て。今よりもっと変わった閑上の姿を見に来てほしい」といいます。

2019年5月 閑上地区まちびらきイベントにて

被災地を訪問した大学生の 声

これまでの「閑上バスツアー学習会」に参加した
尚絅学院大学の学生の感想を一部ご紹介します。

2015年



私が疑問に思ったことは、過去の石碑に大津波があつたことが記されていたにもかかわらず、「閑上は津波が来ない土地」として認識されていたことです。過去の教訓が生かされるように、**正確な情報を伝えていきたい**です。

「小さなことが生死を分けた。それは運命だった。」という言葉が印象に残りました。確かに私自身も震災を経験してそう思いました。しかし、「運命」で終わらせずに、これからも少しでも多くの方に、また、これから生まれてくる子供たちへ震災を語り継いでいくことが大切だと考えました。

閑上で聞いた話、見たものは、5年の月日を「まだ5年なんだ」と感じさせられるものとなりました。初めての参加でしたが、日和山での光景、閑上の記憶は後世に伝える必要があるものだと思います。

閑上地区では津波による**甚大な被害と復旧工事の遅れ**を実感し、心が痛みました。愛島東部仮設住宅での住民の皆様との交流では、震災のつらさを感じさせない明るさや温かさで私の方が元気をもらった気がします。

2016年



2018年



新しい集会所にて、昔の閑上について交流しながら教えていただきました。



7年経った今でもまだ元通りに戻っていません。さらには人が失われ、仮設住宅や復興公営住宅に移動することを余儀なくされた状況が多く見られ、**復興は遠い**ことを知りました。

2年目のバスツアーでしたが、昨年の秋頃に比べて土地整理が進み綺麗になっていたり、日和山の鳥居がリニューアルしたり、「**新たな閑上づくり**」が促進されていることを改めて知りました。

バスツアーに参加するのは3回目でした。しかし何度も訪れても、異なる視点で震災について課題や考慮することがあり勉強になりました。講話の中で「法律が復興の妨げになっていることもある」とお聞きしました。その法律は何十年も前に施行され、現在の状況に合っていないとのこと。**時代とニーズとのミスマッチ**について考える機会となりました。

2019年



一見、震災から8年経ち復興できて笑顔が戻ったよう感じたが、**住民の方々がまだ気持ちの整理が追いついていない**のに次々と道の整備が進んで混乱していること、仮設住宅で5~6年ほど住んでいて生まれたコミュニティを崩され、孤立する住民の方や住民同士での溝が生じてしまっていることも今回知りました。



「住民の気持ちが追いついていない」という言葉の意味を、初めは慣れない環境で**復興のスピード**に気持ちがついていけないという意味だと思っていたが、外部(行政など)と実際に住んでいる住民の方々との復興に対する考え方や復興の段階などに差があって、それに対しての追いついていないということだと知りました。

町歩きをしたのが印象的でした。**昔の閑上の姿が無い**という状況の中、講師の方の好きな場所として紹介していただいたのは、日和山を見ることが出来る交差点付近でした。昔の風景は日和山しか残っていないとお聞きし、どこか寂しそうな背中に胸が痛みました。



2018年からはボランティアチームTASKIの学生が、閑上バスツアーの事前・事後学習会や当日のガイドを行っています。被災地の変化や学びを伝えるため、活動を通じて定期的に閑上を訪問しています。

2017年



住民さんも移り住み、仮設住宅への訪問はこの年が最後となりました。

震災から6年経った閑上の様子や現在抱えている問題などのお話を聞きました。「メディアなどで聞く“復興”とは、**どうすれば“復興”したと言えるのか**」というお話には考えさせられました。

約1年ぶりにバスツアーに参加したが、去年よりもかさ上げがされていてだいぶ変わっていたことに驚きました。**6年という月日は決して短いものではありません**が、私たちが感じている倍以上に仮設で暮らしている方々は長く感じているのだろうと思いました。

復興って なんだろう？

たすき **TASKI** の 主な活動内容

地元被災地（名取市）での支援活動

仮設住宅・復興公営住宅・集会所等での寄り添い支援

■住民さんとの交流

お茶会や交流会の開催、
町内会イベントへの参加など

■カラオケ・演芸大会の開催

発信する・つながる支援活動

他支援者・他大学との合同ボランティア活動・学習会

■閑上バスツアー学習会

現地視察、講話から学ぶ

■フォーラムやシンポジウムでの活動発表

■他大学・高校との連携

合同学習会・ボランティア活動など

■招へい事業への参加

神戸・熊本などへの訪問、相互交流

■学内外研修会への参加

災害ボランティアセンター運営サポーター養成講座など

■TASKIのミーティングや学習会

尚絅学院大学 ボランティアチーム **TASKI**

「T」共に、「A」歩む、「S・K」尚絅、「I」愛（自ら）と、駅伝で人と人をつなぐ「たすき」の意味を込めたボランティアチーム TASKIの活動は、東日本大震災を契機にスタートしました。「つなげる・つたえる・つづける」の3つの「つ」を大切に、途切れないと指すTASKIの活動をご紹介します。

「つなげる」の つ

1つ目の「つ」は、「つなげる」。

これまで仮設住宅や集会所に足を運んだり、大学へ仮設住宅の住民さんを招待する中で、住民さん同士の交流が生まれるよう活動しています。

「つたえる」の つ

2つ目の「つ」は、「つたえる」。

活動を通して、今の名取市閑上や住民さんたちの状況を多くの方々に知っていただくために、SNSなどで情報を発信しています。また、学習会やフォーラム、シンポジウムなどの場でTASKIの活動紹介を行ない、私たちの活動と共に、震災後『被災地』とよばれるようになった閑上のありのままの現在の姿を伝えています。

「つづける」の つ

3つ目の「つ」は、「つづける」。

「1回活動して終わり」ではなく、定期的に活動を続けることで被災地のかたちや住民さんたちの気持ちが変わっても、終わりのない「途切れないと指すTASKIの活動を続けています。



ボランティアチームTASKIの活動の移り変わり－2011～2019－

東日本大震災から8年以上が経過した今も被災地での活動を継続しているTASKI。年を追うごとに内容はどう変化してきたのか、あらためて振り返ってみました。

**2011年3月11日
東日本大震災発生**

とにかくできることを

学生自らが被災地に赴き「名取市災害ボランティアセンター」のスタッフとして活動開始。閉所される8月まで支援活動を行なう。その後、名取市内の仮設住宅にて活動を行なう。

当時の学生の「とにかく笑顔を取り戻したい」という強い思いから、「名取市災害ボランティアセンター」のスタッフとして被災地に関わり、その後避難所から仮設住宅に移られた皆さんのがんばりの日常を取り戻すための支援活動を行ないました。



出所: 東日本大震災アーカイブ宮城(名取市) 提供者: 名取市

なんとか元気になってほしい!

学生ボランティアチームTASKI誕生! 名取市内の仮設住宅や集会所での体操や歌、学生主催のイベント活動(クリスマス、ひな祭りなど)で交流し、楽しい時間をつくるお手伝い。



2013

一人にならないで!

仮設住宅支援の継続。おしるこづくり、書初め、焼き芋イベントなどの活動に加えて、畑作業、花壇作りなどを行なう。

一人で閉じこもららずに、集会所や畠などに顔を出してほしいという思いで、短時間でも回数を重ねた訪問で交流を続けました。



笑顔になってほしい!

学生主催のイベント活動だけではなく、仮設自治会の祭り支援など、より“支える”を意識した活動を実施。集会所でサークルができたり、仲良しグループができたりと住民さんたち自身がダンスや歌を楽しむなど主体的に活動することが増え、それを「お手伝いする」「支える」という役割へと徐々に変化。



2014

少しづつ仮設住宅を出る住民さんが増えたり、次の住まいの話が出てくるなど、これからを考えるようになります。仮設住宅を出た後の夢や不安に寄り添いつつ、支援の形も変化し始めました。



夢を力に!

ひとつひとつの仮設住宅への支援に加えて、仮設住宅間交流の場を設定するなど、仮設住宅を出た後の新しいふるさと、これからのコミュニティ形成への支援活動を実施。

2015

新しいふるさとへ…

仮設住宅から復興公営住宅等へと住民さんの住環境の変化に伴い、被災地の課題も変化。改めて“寄り添い”的大切さをチームで再確認し、長期的視野に立った支援について考えるようになります。

新しいふるさとへ向け、カラオケ・演芸大会などのイベントを通して仮設間交流でのコミュニティ形成への支援活動を実施。住民さんが仮設住宅を出て、復興公営住宅へ引っ越すにあたって“寄り添い”的大切さをチームで再確認。住環境の変化にともなう被災地の課題に取り組みました。

2016

やっぱりつなげる つたえる つづける

仮設住宅の自治会や他の支援者の方々と協働しながら、住民の皆さんの“自らの復興”を支援。一方で次世代に震災を伝えるための学生の学び直しや、さらなる他大学の活動サポートも行なう。



2017

これまでの活動経験を活かし、次世代や他の地域についていく活動も継続して行ないました。さらに神戸を訪問し、阪神淡路大震災の経験について知るなど他県の災害や経験、教訓、課題にも目を向け、自分たちの今後の活動について考えました。



2018

復興ってなんだべ?

これまでの“寄り添い”支援を継続しながら、閑上の新しいまちづくりを応援。住民交流会などに参加し、新しい団地のコミュニティづくりのお手伝いを行なう。

2019

今の閑上見てけさい!

町内会が発足し、住民さん主催のイベントが行なわれるようになり、5月には地域と行政・企業・学校などが連携した“閑上地区まちびらき”が開催された。住民さんに寄り添いながら被災地の今の姿を知り、伝えていく活動を継続している。



ボランティアチームTASKIの活動の紹介

被災された住民さんの
住環境の変化に合わせて活動をしてきました。
ここではその一部をご紹介します。

名取市災害
ボランティア
センター



名取市内
仮設住宅等



名取市内
復興公営住宅
集会所等



楽しい時間と交流の きっかけづくり

仮設住宅の集会所でお茶会などのイベントを実施したり、
自治会のイベントに参加することで、楽しくお話ししながら、
住民さん同士の顔合わせや交流のきっかけづくりをしてきました。

- お茶会の実施
- 焼き芋大会やクリスマス会、書き初めなどのイベント
- 畑作業や花壇づくり
- 自治会のお祭り支援など



語らい



楽しみ



応援



歌・踊り



活力



やりがい・生きがい・目標の きっかけづくり

- 名取復興文化祭(音楽祭)
- カラオケ・演芸大会
- 集会所サロンでのダンスや歌の練習など

名取復興文化祭(音楽祭)

歌やダンス、手芸などの発表会。楽しみを通してつながり、やりがいを見つけるための「きっかけづくり」をお手伝いしています。(2016~2018年、名取市サポートセンターどっと、などり共催)



活力



自らの復興・ 新しいふるさとづくりの応援

住民さん自身による新しいまちづくりやコミュニティ形成を応援し、これまでの仮設住宅支援活動の中で続けてきた「寄り添い」の活動を継続しています。

- 新しい団地での交流会
- 町内会や住民さん主催のイベントのお手伝いなど



つながり

交流

新たな
コミュニティ

ボランティア学習会

被災地でボランティア活動を行なう心構えとして、実際に現地を訪問し、被災地の今の様子を自分の目で見て、あの日のことを知り、復興とは何か、これからの災害への備え、教訓を学びます。

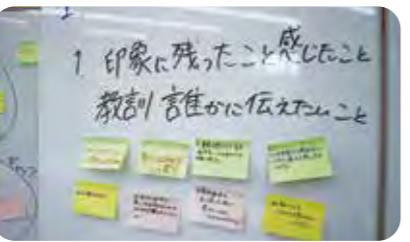
- 開上バスツアー学習会
- 他大学・高校との合同学習会など



復興とは
なにか…
大学生に
できることは
何か…



講師から
あの日あの時から
現在までの
お話を聞く



他大学や高校との連携・交流

TASKIは県内外(兵庫や千葉、福岡など)の大学生や高校生との交流活動にも力を入れ、お互い訪問し合い意見交換や現地視察・合同ボランティア活動などを行なっています。招へいプログラムやシンポジウムを通して、神戸や熊本に訪問する機会もあります。また2018年からは神戸訪問プログラムを実施し、阪神・淡路大震災の教訓や経験を学んでいます。



復興
公営住宅での
合同活動

他大学や高校との連携・交流 (p27参照)

東北大・仙台大・東北学院大(宮城県)
大学コンソーシアムひょうご神戸
多摩大・法政大(東京都) 敬愛大(千葉県)
同志社大(京都府) 聖学院大(埼玉県)
西南学院大(福岡県)
尚納学院高等学校・桜の聖母学院高等学校(福島)
ほか



神戸訪問
プログラム



学生間
ワークショップ
・意見交換



復興大学
in熊本

2011年名取市災害ボランティアの様子



2

011年3月11日の地震発生後、偶然知人の母から「名取市(市役所)でボランティア活動をしている」という話を聞き、はじめは個人的にボランティア活動に携わりました。名取市では、震災から1週間後、名取市体育館に名取市社会福祉協議会(社協)が運営する災害ボランティアセンターが設置され、津波の被害を受けた地域(閑上など)の土砂出しや避難所の公衆トイレ掃除、支援物資の仕分け、津波で流された漂流物(写真や位牌、ランドセルなど)を綺麗にする活動などを行なっていました。当時センターは、全国から集まつくるボランティアの方々の対応にも追われていました。そんな中で、個人で活動していたある学生が「名取市の大学生として自分たちが社協の方々のお手伝いが出来ないか」と声をあげました。

大

学再開から約1年後、大学内にボランティアステーションが設置され、ボランティア団体として発足することになりました。チーム名はこれまで活動を行なってきた学生の皆で考えました。チーム名のTASKIは、駅伝などの際に手渡される「襷」(たすき)をイメージしており、つながる、つづける、縁をつなぐ、伝えるなど様々な想いが込められています。



column.2

先輩インタビュー

人間心理学科 2013年卒

斎 美紀さん

また、T(共に)、A(歩む)、S(尚)、K(絆)、I(愛・自ら)という意味も皆で考え、チームとして活動を行なってきました。



Q & A

Q: 当時どのような気持ちからボランティアを始めましたか?
A: 知人の母(当時、開上の保育所に勤務)の話を聞いて、「何かしなくていいいけない!」とボランティアをはじめました。

Q: 2011年当時、尚絆からボランティアを行った学生は何人いましたか?
A: 最初はまばらでしたが、大学間でボランティアの声掛けも行なったことから、参加する学生も増えていき、8月までに1,400名が参加しました。

Q: ボランティアをしていて課題などはありましたか?
A: 名取市の沿岸地域で、津波により壊滅的被害を受けた閑上や被災地の現状を見て、ボランティアに参加した方々の中には、ショックを受けてしまう方もいました。そのため、活動に参加した方々の精神面をケアするボランティア(ボランティアのボランティア)も必要なのではと、当時は課題となっていました。

ボランティアチームTASKIの歴代活動パネル集－2012～2019－

仮設住宅等での交流イベント



2018.9.1 名取復興文化祭2018
2016.11.12~13 名取復興音楽祭2016

名取復興音楽祭・文化祭

閑上バスツアーライブ



他大学との学習会



東 日本大震災から8年が経過した
2019年5月26日(日)、「閑上地区まちびらき」(同実行委員会・名取市主催)が行われました。支援いただいた全ての方々への感謝と復興した姿を見いただきたいという思いを伝えるイベントに、住民さんと共に学生たちも一緒に参加しました。



column.3
2019.5.26
閑上地区まちびらき
ゆりあげ伝言板

私たちにできることはなんだろう

交流・合同活動を行なった全国の主な大学・高校

- 合同プログラムの実施、参加
- 招へいプログラムへの参加・派遣など

● 東北大学
● 東北学院大学
● 仙台大学
● 尚絅学院高等学校
● 桜の聖母学院高等学校
● 大学間連携災害ボランティア ネットワーク 参加校（全140校）
● 学都仙台コンソーシアム（加盟全21校）
復興大学
災害ボランティアステーションなど

● 大阪体育大学 ● 神戸学院大学
● 同志社大学 ● 流通科学大学
● 神戸大学
● 大学コンソーシアムひょうご神戸（全40校）など

● 西南学院大学 ● 熊本学園大学
● 尚絅大学・尚絅大学短期大学部など

● 敬愛大学 ● 法政大学
● 聖学院大学 ● 敬愛高校など
● 多摩大学

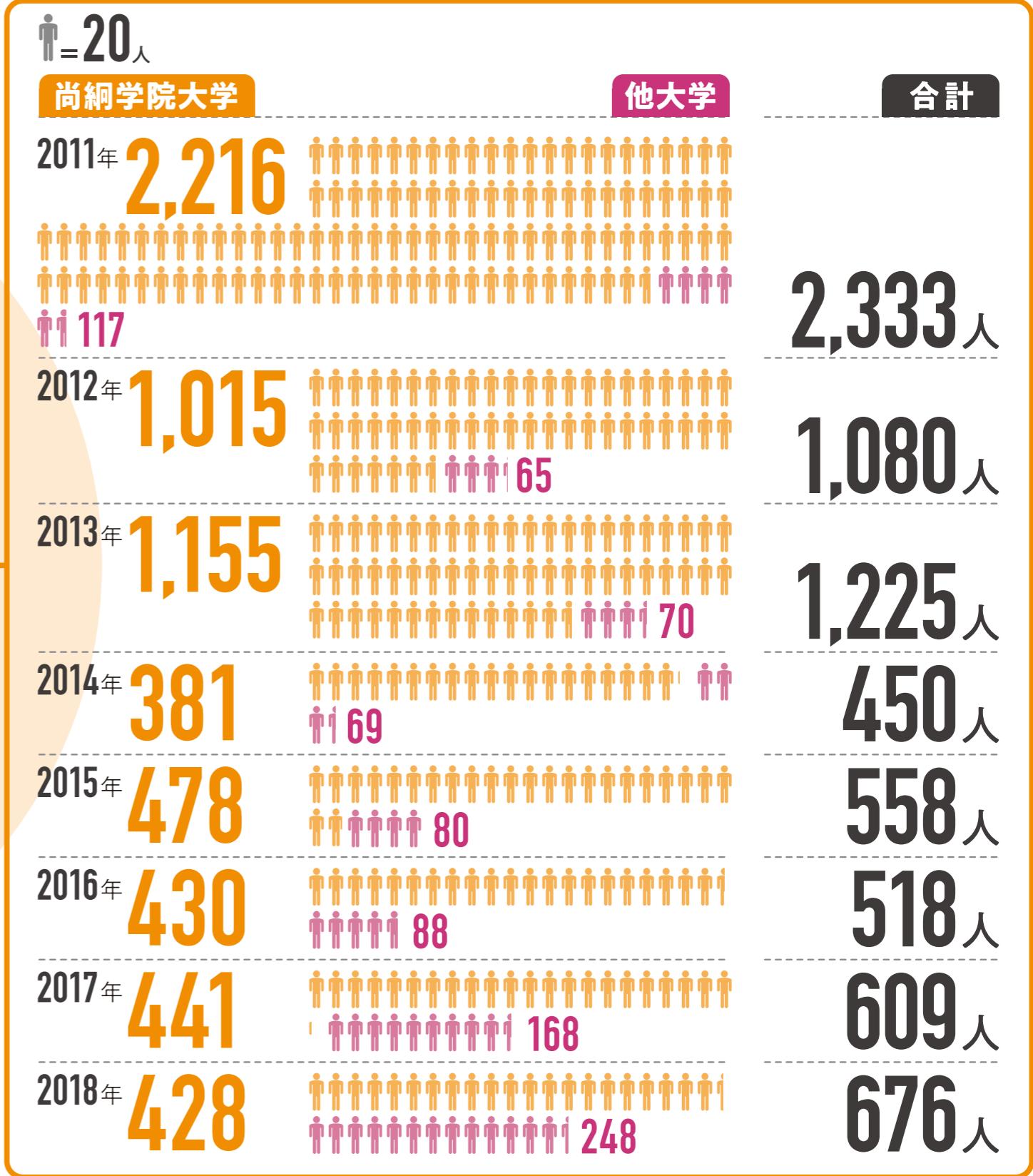


全国各地から参加してくれたたくさんの大学生・高校生と一緒に活動しながら「私たちにできることはなんだろう」と考え続けています。

東日本大震災以降、尚絅学院大学の学生は地元宮城県名取市を中心に被災地で支援活動を続けています。全国各地から多数の大学生・高校生とも一緒に支援活動や学習会等を行なって共に学び、交流を重ねてきました。

これまでの繋がりから、尚絅の学生も神戸や熊本を訪問して視察や意見交換を行なうなど、お互いの地域の支援や復興の形を知ることで自分たちの活動を振り返り、“私たちにできることは何か”を考え続けています。

2011～2018年の間に、約7,500人の学生・教職員が活動に参加!!



大学間連携プログラムの紹介

これまでに県内外の様々な大学と、大学間連携プログラムを実施しています。その中でも震災直後の2011年から継続して毎年夏に実施している合同プログラムを2つご紹介します。

大学コンソーシアムひょうご神戸(兵庫県)

大学コンソーシアムひょうご神戸のボランティア事業として東日本大震災が発生した2011年から毎年夏に神戸の学生が宮城県名取市を訪れ、TASKIと一緒に仮設住宅でのイベント開催や清掃活動等のボランティアを行なってきました。

2019年の夏は新しい閑上中央集会所で住民さんたちとの交流会や学生間のワークショップを実施しました。

また、近年は事前研修や報告会、阪神・淡路大震災を学ぶための学習会、1.17のつどい等で神戸を訪問するなど一年を通じて交流を深め、充実した活動と学びに繋げています。

大学コンソーシアムひょうご神戸

兵庫県下の32大学、7短期大学・短期大学部、1高等専門学校の計40校、学生総数約10万人を母体に活動。

2019年度は12大学47名が、学生災害ボランティア・ネットワーク事業に参加。

2011年



2014年



2018年



2019年



敬愛大学(千葉県)

千葉県の敬愛大学の皆さんは、東日本大震災が発生した2011年から毎年宮城県名取市を訪れ、TASKIと一緒に仮設住宅でのお茶会や清掃活動等のボランティアを行なってきました。敬愛大学の皆さんがあつた愛島東部仮設団地集会所前の花壇にはいつもきれいな花が咲き、その隣のベンチで住民さんたちが毎日楽しくお話しするのが日課になっていたようです。その後も毎年、復興公営住宅等での住民交流の活動を続け、2018年には福岡県の西南学院大学の皆さんも一緒に3大学合同学習会を実施。各大学の活動報告や熊本地震・北九州豪雨災害ボランティアについての話を聞き、意見交換を行なってお互いの学びを共有しました。

2011年



2011年



2014年



2017年



2017年



2018年



2019年



2018年・2019年は西南学院大学と3大学合同で実施

つづける

私たちにできることはなんだろう

つなげる・つながる

継続した学び

行政が手をまわしにくいところの支援

「ボランティア」をもっと身近なものにしたい

住民さんにとって「忘れられない」を届ける存在になる、行き続ける

当事者意識を持つ

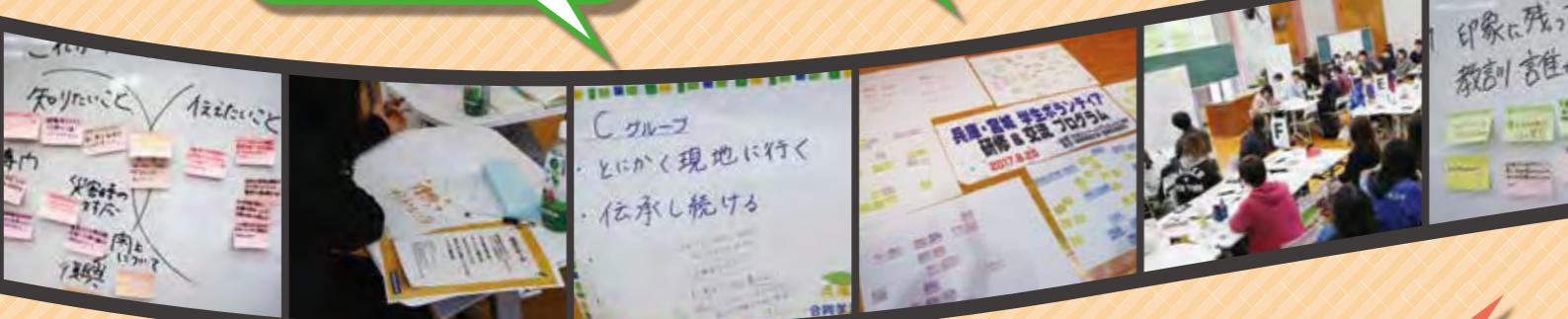
それぞれの立場の人の気持ちを知る

もっと色々な立場の方から話を聞きたい

防災意識を持つ

とにかく現地に行く

想い続ける



伝える、寄り添う、忘れない

風化させない

伝承し続ける

友達や家族、SNSで発信

東北の良さを、
学生だからこそできるやり方で、
たくさん的人に伝えたい

小学生など知らない世代の
子どもたちに伝える

災害を忘れない。後世に伝えていく

第三者として被災された方から
「本音」を聞く

声

皆さんのお声をお届けします！

全国の 大学生・高校生の

継続した学び

「ボランティア」という言葉に
頼らない交流をしていきたい

想い続ける

交流の機会をつくる

若者会をつくる！

住民さんのつながれる環境をつくる

自分たちが「先駆者」になる！

世代間のかけはし

これからの世代に震災の経験を伝えるには？

震災の学びなおしをする

「減災」のために伝える

自分事として被災地のことを捉えて、
その教訓を伝える

地域交流の時間を多くする

ボランティアに参加する

情報の入手方法が少ない高齢者に
正確な情報を伝える

今日のことをしっかりと記憶して、
いつか自分の子どもに伝えたい

Learn from history, Build for the Future.
—歴史から学ぶことがある—

つたえる

被災地のリレー～神戸から学ぶ～

2018年度より、東日本大震災の被災地だけでなく他の地域の震災についても学びを深めるために「神戸訪問プログラム」を実施しています。1995年の阪神・淡路大震災から25年が経過した兵庫県神戸市を訪問し、フィールドワークや語り部の話を通じて震災やその当時の状況について知るとともに、その後の復興の歩みについて学び、地元名取市での活動や今後の災害・防災について深く考えるプログラムです。

人と未来防災センター

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災について、映像や資料、語り部の話などから学び、防災・減災について学ぶことができる施設です。東日本大震災の映像・展示や、南海トラフ巨大地震に向けた研究についても紹介されています。



- 1:語り部さんのお話
- 2:これからの巨大地震の可能性は…?
- 3:津波避難の難しさを体験
- 4:災害への備えを体験

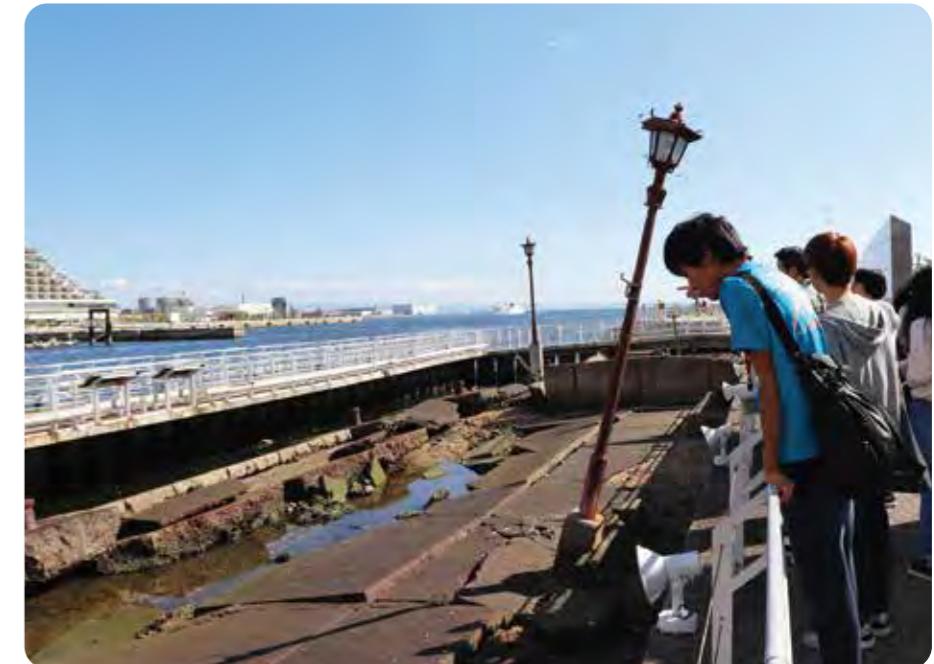


神戸港震災メモリアルパーク

神戸のランドマークである「神戸ポートタワー」などがある公園内に、阪神・淡路大震災によって被災したメリケン波止場の一部が遺されています。



神戸市内フィールドワーク



HAT神戸 (災害復興公営住宅)



HAT神戸とは神戸市東部の再開発地域で、「Happy Active Town」の略称。HAT神戸灘の浜の災害復興公営住宅団地を訪れ、「なぎさふれあいまちづくり協議会」の皆さんから、復興公営住宅のまち・コミュニティづくりについてお聞きしました。



岩屋地区 (災害復興公営住宅)

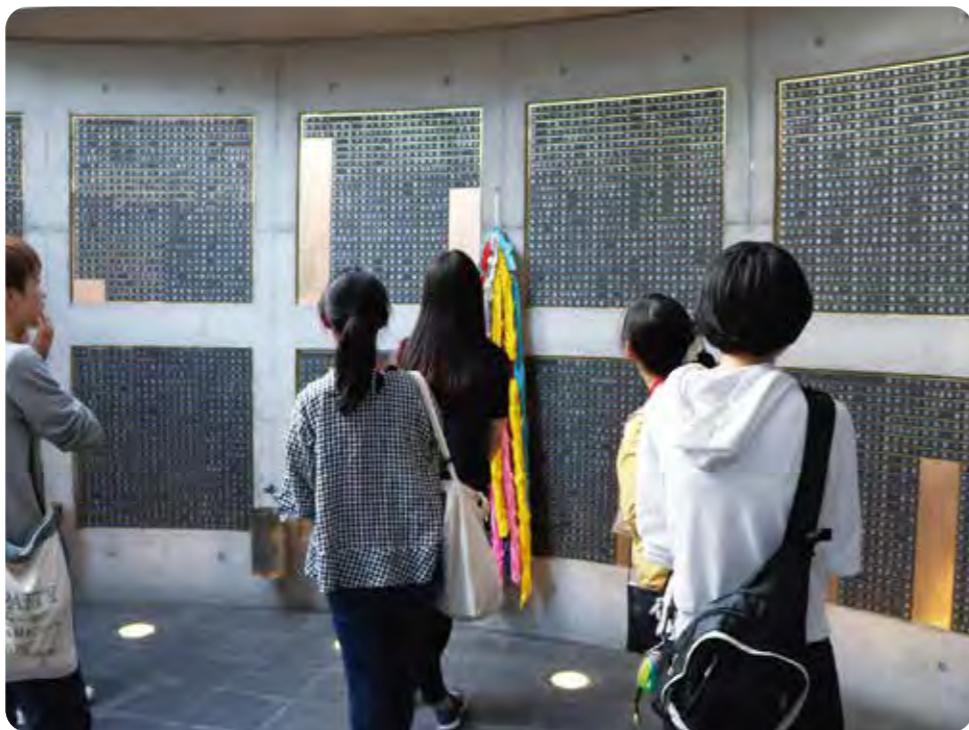
2019年は、HAT神戸の近くにある岩屋地区の公営住宅にお伺いしました。



神戸市内フィールドワーク

東遊園地

東遊園地は、神戸市役所の隣にある公園で、阪神・淡路大震災が発生した1月17日に「1.17のつどい」という追悼行事が行われる場所でもあります。公園内には、数々の震災遺構に加えて、震災で亡くなった方の名前が刻まれた「慰靈と復興のモニュメント」や、「1.17希望の灯り」というモニュメントがあります。この希望の灯りの火は、有志団体やボランティアにより、名取市内の仮設住宅等にも運ばれ、慰靈行事において竹灯籠に灯されるなど、神戸と名取を結んでいます。



阪神 高速道路 橋脚

震災の影響で折れてしまった橋脚や道路部品の一部



長田地区

震災後の大火災によって、商店街や住宅が甚大な被害を受けた長田地区。商店街の方や地域の皆さんにお話を聞きながら、実際にまちを歩きました。



被災後に商店街の再興に尽力した方など、地域の皆さんのお話を聞きました。新たに整備された展示スペースも訪問しました。



廃校になった小学校(現在はコミュニティ施設)において長田地区の被災状況について学びました。



まとめてみよう！

1 学び

印象に残ったこと、感じたこと、教訓を得たこと、誰かに伝えたいこと…

2

学びをきっかけに…

もっと知りたい・学びたいこと/自分の専門で・地域で活かしたいこと…

TASKIの想い

2020年、東日本大震災から9年が経過。

現在のTASKIのメンバーは、2011年当時、小・中学生でした。

学生はどのような想いで活動を始め、復興について
どのような想いを抱いているのでしょうか。

1年生に 聞きました！

- ① TASKIで活動を始めたきっかけは？
- ② 今後の活動への意気込みをどうぞ！

人文社会学群 1年／菅原 良真

- ① 僕は、友人のすすめで、TASKIに入りました。元々、高校生の頃にも、生徒会のボランティア活動に頻繁に参加していたこともあってボランティア自体に興味があったので、良い機会だと思い始めました。
- ② 今現在、活動している人が少ないため、いろいろな方にTASKIの活動に参加してもらいたいです。やっぱり、ボランティアをすることは敷居が高いように感じる人が多いようなので、そういった印象を払拭できればいいなと考えています。ただ、遊び場だと思われてもダメなので、難しいところだと思います。新しいメンバーを増やすために、自分たちTASKIがどういったチームなのか知ってもらう必要があると思うので、様々な形で説明するような、活動をしていきたいです。



健康栄養学群 1年／黒木 麻瑚

- ① 高校の時、尚絅学院大学に進学を決めた際にボランティアチームのTASKIが被災地で活動をしていることを知り、実際に被災地を見たことがなかったため自分の目で確かめてみたいと思ったからです。
- ② これまで回数は少ないですがバスツアーや閑上でのボランティアに参加して、住民さんたちと交流しお話をする機会が増えてきました。そこで感じたことをその時だけのものにするのではなく、周りの人と共有して伝えたいと思います。また、これから行う学生企画のボランティアでも様々な方の力を借りながら企画を考え、自分が出来ることを見つけていきたいと思います。



人文社会学群 1年／山本 想良

- ① 私は長野県から大学進学をきっかけに宮城県へきました。震災から8年経った今復興は終わっている、と思っていたがまだ、復興の途中だと知りとても驚きました。なので、震災のこと、それから復興を遂げていく町と復興に奮闘している方々にたくさんお話を聞きたい、交流したいと思い、TASKIに入りました。
- ② TASKIの先輩方が今までしてきた活動、そしてこれから僕たちがしていく活動をもっとたくさんの人に多様なツールを使って伝えていく、という事をしていきたいです！



健康栄養学群 1年／加賀 佑香

- ① 東日本大震災がきっかけになっています。当時は小学生だったのでなにもできませんでしたが、震災で被災された方に何かしたいと思いました。コミュニティを作るきっかけをつくり住民さんの手伝いをしたいです。
- ② 今後も、閑上の住民さんと交流をしていきたいと思います。神戸訪問の時に、意見交換をした神戸の学生さんが東北に来たいと言ってくれたので、自分が出会った人が少しでも閑上に来てみたいと思ってくれるよう活動していきたいです。また、これまでに参加した活動を他の人にも伝えたり、今後、自分達が災害にあった時に対処できるように活動しながら学んでいきたいです。



4年生に 聞きました！

- ① TASKIで活動を始めたきっかけは？
- ② これまでの活動を通して考える、あなたにとっての「復興」とは…？
- ③ TASKIの活動で得たこと、その経験を自分の将来にどう活かしていきたいですか？

環境構想学科 4年／小山 夏実

- ① 私の地元も東日本大震災の津波によって甚大な被害を受けました。幸いにも自宅も家族も無事で、中学・高校と平穏に過ごしました。しかし、大学入学後のサークル紹介でTASKIの紹介を聞き、自分は被災地にいるのにも関わらず、当時の避難所の状況や仮設住宅での暮らし、地元以外の被災地はどのような被害を受けたのか等何も知らないことに気が付きました。これがきっかけでTASKIに入り、今に至ります。
- ② 震災を経験した方々が「復興した」と思えたら、です。この活動を通して多くの方に出会いました。前を向いている人、心に傷を負っている人、後世に震災を伝えようとするなど様々です。その方々が心から「復興したー！」と思えることが復興なのかなと思います。それはとても難しいことで、私達が生きているうちには終わらないものだと思います。
- ③ 閑上の住民さんとの関わりや他大学の学生さんとの交流の中で、自分の目で確かめ、考えることの大切さを学びました。この経験を、後世だけではなく色々な人に伝えていくことしかできないのかなと思います。いざ震災が起きたときに「あの学生がこんな話をしていたな」と思い出してもらえるような、その人の命を守るきっかけとなってくれるような伝え方をしたいです。



3年生に 聞きました！

- ①TASKIで活動を始めたきっかけは？
- ②これまでの活動を通して考える、あなたにとっての「復興」とは…？
- ③TASKIの活動で得たこと、その経験を自分の将来にどう活かしていきたいですか？



健康栄養学科 3年／下山 陽子

- ①3年生の春にTASKIが毎年主催している閑上バスターに参加したことがきっかけです。復興への取り組みや住民の方々の話を聞いて、自分にできる事は何かもっと知り、考えたいと思いました。
- ②『re-connection』周囲の人たちとの繋がり、住んでいる地域や家など場所との繋がり、そして自分の気持ちや他者の気持ちを見失わないための心の繋がり。生きていればたくさんの繋がりがあると思います。私は災害やTASKIの活動を通して、その繋がりの存在や大切さに気づかされました。災害はその繋がりを希薄化・分断してしまいます。被災した方々がその繋がりを取り戻すことができるように、また新しい繋がりを築くことができるよう、取り組んでいきたいです。
- ③私がTASKIに入って最も良かったと思ったことは、いろいろな人たちと出会えたことです。同じようにボランティア活動をしている学生たちや、お茶会などのイベントで出会った住民さんたち、災害や被災地について教えてくださった方々、そしてTASKIのメンバー。皆さんと実際に会って話してみて、「繋がり」の存在や大切さ、おもしろさを知ることができました。その経験から、**将来はさまざまな人や物事を繋ぎ合わせて新しい発見や暮らしをより良いものにしていけるような仕事をしたい**と考えています。



健康栄養学科 3年／逸見 彩絵

- ①東日本大震災で被災した場所は、今どうなっているのかを知りたいと思い、**入学してすぐに閑上バスターに参加しました**。そこで経験した住民さんとの交流が楽しかったので、自分もこれから活動を続けていきたいと思いました。
- ②人それぞれ違うもので、「ここまで復興したなあ」と思う人もいれば、「いつになったら復興というのか分からない」という人もいると考えています。**人それぞれ考え方は違うし、誰かが決めていいものではない**と思っています。自分が納得すれば、それが復興なのかな…？
- ③TASKIの活動でたくさんの新たな人との繋がりができました。TASKIの学生や活動を支えてくれる職員さんはもちろん、閑上の住民さんや、宮城まで来て一緒に活動や学習会をしてくれる他大学の学生など。**この活動をやっていたからこそ出来た繋がりを、あと1年、そして卒業後も大切にしていきたい**と思っています。この繋がりの中で、TASKIは震災後からどんなことを続けて来たのか、被災した場所や人はどんな歩みを辿っているのかなどを発信し、もっと多くの方にボランティアの楽しさを感じてもらったり、ボランティアを始めるきっかけづくりをしていきたいです。



現代社会学科 2年／山本 楽人

- ①私は入学後に漠然と「ボランティア活動をしたい」と思っていました。東日本大震災後に被災地を訪れる機会があり、その変わりように驚きました。そして、自分にも何かの役割があると思い始めたことがきっかけです。
- ②私にとっての「復興」とは、震災前の幸せな思い出が蘇ったときだと思います。被災された住民さんは、震災後、慌ただしい毎日を過ごされてきたと思います。この当時、その住民さんは震災前の幸せな記憶を回想するより、目先のことが優先すべきことだったと思います。したがって、私は住民さんが小学校の思い出や楽しかった出来事などを振り返れる時間を作ることができたら、復興したといえると思います。
- ③TASKIの活動で得たことは、行動力です。私は、TASKIの活動を通して、神戸学院大学が主催する招へいプログラムに参加し、それを境に、失敗を恐れず何事にも挑戦する姿勢を学びました。この経験を将来、人の役に立つ活動に活かしたいです。なぜなら、誰かの役に立つためには、行動することが一番大切だと思っているからです。例えば、私は東日本大震災当時、被災地でボランティア活動をするという考えが浮かびませんでした。自分には何もできないと思っていたからです。これは、行動力の差だと感じています。私はこれからも**行動力を強みにし、自分の興味がある分野で人の役に立てる活動に取り組んでいきたい**です。



2年生に 聞きました！

- ①TASKIで活動を始めたきっかけは？
- ②これまでの活動を通して考える、あなたにとっての「復興」とは…？
- ③TASKIの活動で得たこと、その経験を自分の将来にどう活かしていきたいですか？



子ども学科 2年／堀子 明日香

- ①特に震災関連の活動にこだわっていたわけではなく、何か自分にできることはいかど思いました。TASKIに入ったのがきっかけです。東日本大震災の学習会で震災のことをあまり知らないと気づき、震災を知るという面でも徐々に活動に参加するようになりました。
- ②被災された方にとっては、身の回りのあらゆることに折り合いをつけながらにはなるかもしれません、震災に関する不安を一切抱えずに日常生活を送れるようになります。被災された方が口にした「復興は永遠にない」という言葉から、震災による心の傷や不安が全てなくなる限り、復興は実現しないのだと思えるようになりました。
- ③人との繋がりの大切さを知りました。被災された方、命がけの経験をした方との繋がりや、学生同士の関わりでも多様な考え方を受け刺激を受けています。活動を通して出会った人との繋がりは、単純に「震災のことを知る」といったことで片付けられるものではなく、自分の物の見方を大きく広げてくれた偉大な存在ばかりです。その方々との繋がりを通して得た知識や教訓をもとに、将来は消防士として勤務し、**災害が起こった際には一人でも多くの命を救えるような人々に貢献できる人間になりたい**です。

おわりに

TASKIがこれから目指すこと

名取市では2019年5月に『閑上地区まちびらきイベント』が行なわれ、2020年3月にハードの復興完成を表す『復興達成宣言』が予定されています。そして、2021年3月11日には東日本大震災発生から10年を迎えます。

私たちは被災地を訪れる度に「復興ってなんだろう…」「大学生として、なにができるのか…」と考えてきました。また阪神・淡路大震災から25年を迎えた神戸からも学び続けています。

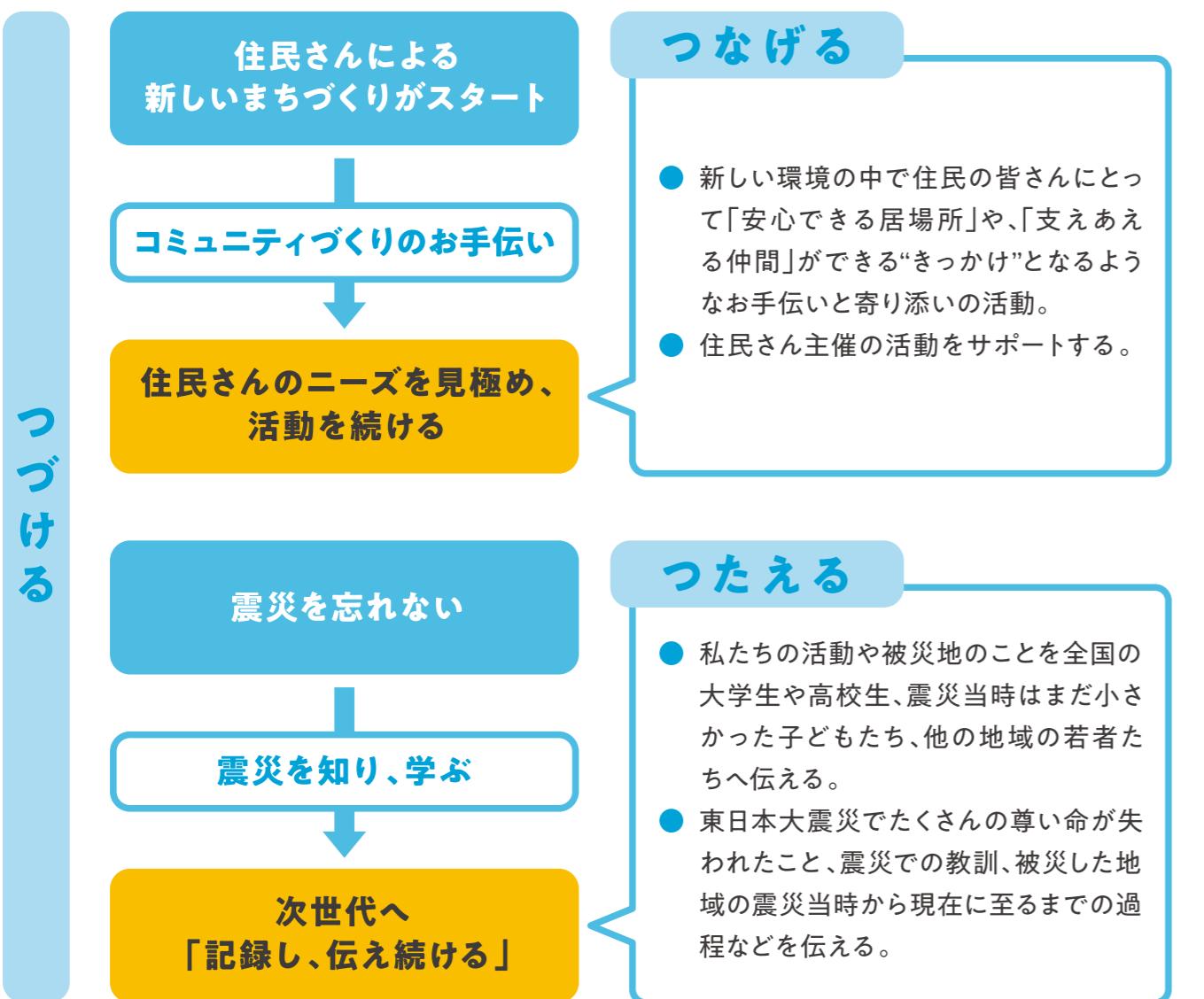


今私たちが行なっている活動は
果たして「住民の皆さんためになっているだろうか」

むしろ「住民の皆さん自身が前に進むことを妨げていないだろうか」と
模索しながら、様々な変化に合わせながら、現在も寄り添いの活動を続けています。



最後に、これからのTASKIが目指すことをご紹介します。



活動 動を始めて3年、私の大学生活の一部に、「被災地のボランティア」が入っています。入学すぐの緊張していた頃と比べて、今やもう閑上は第二の地元のように思っており、ボランティアも“地元に帰る”ような感覚です。住民さんと、まじめに話をしたり、楽しく笑いながら交流しています。

この冊子はそんな私の思いの一部と、震災後から8年にわたって活動を続けてこられた先輩方の思いが詰まったものになりました。TASKIの活動と、被災地と呼ばれるようになった閑上のこれまでを全国の人々に発信することを目的として冊子を作っていましたが、この冊子が、手に取った誰かの行動や新たな気持ちのきっかけになれば、と願っています。

(健康栄養学科3年 逸見 彩絵)

最後 後まで読んでいただき誠にありがとうございます。この本を読んでくださった方に、ぜひお願いがあります。それは、この本で印象に残ったことを誰かにお話してほしいということです。津波のこと、復興とは、閑上のことなど何でも大丈夫です。皆さんに誰かに伝えることで、この本は「震災を後世に伝えていく」という役割を果たすことができます。どのようにして震災を後世に伝えていくか、これは私達の課題の一つです。少しでも多くの人に東日本大震災のことが伝わり、これから起こり得る災害から多くの命が助かる事を願っています。また、災害発生時のボランティア活動について私達の活動記録が参考になれば幸いです。ありがとうございました。 (環境構想学科4年 小山 夏実)

2 011年3月11日の東日本大震災からまもなく9年が経とうとしています。学生たちが東日本大震災後の現場や辛さを抱えた人々に直面した時、皆少なからず戸惑い悩みながらも、他人ごとではなく自分ごととして、寄り添う気持ちを大切に活動を続けてきました。

9年という長い期間、心の“たすき”をつなげることができたのは、多くの援助はもちろんのこと、一緒に活動してきたチームの仲間や市民の皆さん、次に進む道を作ってくれた先輩たち、思いをひとつにする全国の学生とのつながりがあったからだと思います。

そして、学生たちは今、第二の故郷に帰るような気持ちで閑上を訪れるようになりました。それは、閑上の皆さんのがいつも学生たちを温かく受け入れ、我が子や我が孫のように育ててくださったからです。

この冊子は、活動の記録を残すだけものではありません。活動を通して見えたその時々の被災地の状況や、人々にじみ出る気持ちを伝えることで、次世代や他地域の防災・減災・復興に繋がる小さなヒントになり、「復興ってなんだべ(復興ってなんだろう)」と一緒に考える機会になればと思います。

最後になりますが、お力をいたいでいる全ての皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

(尚絅学院大学連携交流課長 佐々木 真理)

参考文献

- 『名取市における東日本大震災の概要』
名取市総務部 震災記録室 編集 平成27年3月 名取市発行
- 名取市「昭和三陸津波の碑」
https://www.city.natori.miagi.jp/soshiki/kyouiku/node_28152/node_1793/node_1794/node_31881
- 名取市「東日本大震災慰靈碑建立のお知らせ」
https://www.city.natori.miagi.jp/soshiki/soumu/seisaku/node_27436/node_30103
- なとり100選「閑上の『閑』の文字」
<https://www.city.natori.miagi.jp/natori100/019.htm>
- 東北地方整備局 震災伝承館(東北地方整備局)
<http://infra-archive311.jp/w04.html>

協力

- 名取市
- 東北地方整備局
- 一般社団法人東北地域づくり協会
- 東日本大震災アーカイブ宮城～未来へ伝える記憶と記録～
<https://kioku.library.pref.miagi.jp/>
- 名取市図書館 名取市震災アーカイブ
<https://lib.city.natori.miagi.jp/311arc/homes>